

小学校「特別の教科 道徳」と特別な教育的ニーズとの関連

— 2023年改訂検定教科用図書の読み取りを通して —

相澤 雅文¹・岡田 恵未²・福本 拓耶²・今江 壮磨²

(1: 京都教育大学・2: 京都教育大学特別支援教育特別専攻科)

The Relationship between the Elementary School "Special Subject Moral Education" and Special Educational Needs

— Through a Reading of the 2023 Revised Authorized Textbooks —

Masafumi AIZAWA, Emi OKADA, Takuro FUKUMOTO, Souma IMAE

抄録:2017(平成29)年の小学校学習指導要領の改訂により「特別の教科 道徳」となり、検定教科用図書が導入された。「特別の教科 道徳」では、特別な教育的ニーズや障害理解を進めることも大切な取り組みとなっている。本研究では3名の調査者が、6社の道徳科検定教科用図書の教材・補助教材等の総数1303編を読み、その中に特別な教育的ニーズが表現されていると判断された教材についてその特別な教育的ニーズの内容と明確性を3段階(0～2)で評価を行った。その結果、「LGBTQ+」や「ゲーム依存症」、「外国につながる子ども」などについても取り上げられていることが分かった。また、「直感的に分かりやすい特別な教育的ニーズ」が多く取りあげられ、「発達障害」のようなはっきりと見えにくい内容は少ないことも示された。また、出版社によって特徴があることや、道徳科の内容項目、22項目全てで特別な教育的ニーズについて取り上げられていることが分かった。

キーワード:「特別の教科 道徳」、道徳教育、検定教科用図書、特別な教育的ニーズ、障害理解教育

Key Words: Special Subject: Morality, Moral Education, Certified Textbooks, Special Educational Needs, Disability Awareness Education

I. 問題と目的

1. 「特別の教科 道徳」について

(1) 「特別の教科 道徳」改定の背景

2017(平成29)年、小学校学習指導要領の改訂が告示され、それまで「教科外の領域」であった「道徳」が「特別の教科 道徳(以下:道徳科とする)」と改定された。

道徳科が特別の教科とされた背景として、

- ・ 深刻ないじめの本質的な問題解決
- ・ 情報通信技術の発展に伴う子供の生活の乱れ
- ・ 子どもをとりまく地域や家庭の変化
- ・ 自己肯定感や社会参画への意識の低さ
- ・ グローバル化の進展や科学技術の進歩、少子高齢化などの目まぐるしい社会状況の変化

などがある。

特に、「いじめ問題」が大きな契機になっており、2011年度頃から全国の小・中・高等学校及び特別支援学校で認知されたいじめの教材数は増加傾向にあった。教育再生実行会議第一次提言(2013)において、いじめ問題の対応について道徳教育の重要性が改めて指摘されていた。また、それを事由とする不登校も増加の一端をたどっていたことが導入されることの後押しとなった。

(2) 道徳科の改定にともなう教科書の使用

「道徳教育の教材・教科書について」（文部科学省, 2014）で、道徳科の「主たる教材として検定教科書を用いることが適当」とし、「児童生徒の多角的・批判的な思考力・判断力・表現力等の発達の観点に十分に配慮した創意工夫のある良質な」教科用図書が作成されることが期待された。

教科化されたことにより、文部科学省検定済みの「教科用図書」の使用が義務付けられることになり、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説「特別の教科 道徳編」（2017）においても、「主たる教材として教科用図書を使用しなければならない」と記された。小学校では2018（平成30）年度、中学校では2019（平成31）年度より検定教科用図書が導入され道徳科が本格実施された。

小学校の道徳科の教科用図書は、2023（令和5）年度に改訂され、検定を受けた教科用図書が、2024（令和6）年度使用されている。

(3) 道徳教育と道徳科

小学校学習指導要領（2017）によれば、「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を」行うとされている。

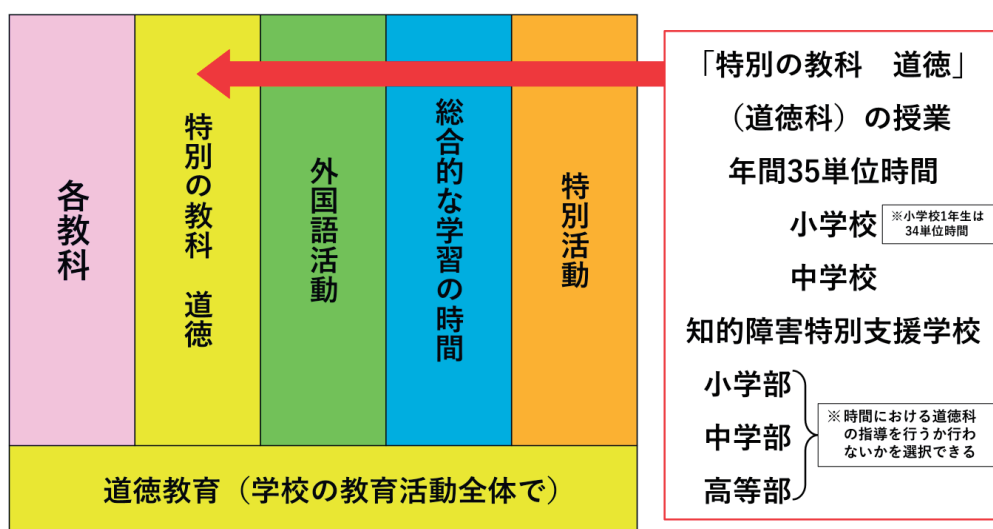


図1 道徳教育と道徳科

文部科学省は、以下のように道徳教育の4つの視点を示した。

- A 主として自分自身に関すること B 主として人との関わりに関すること
C 主として集団や社会との関わりに関すること D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
さらに、22の内容項目を示し、それに基づいて道徳科の学習を進めることとした。

(4) 本研究の目的

特別な教育的ニーズ及び障害理解教育と道徳科との関連を示した先行研究について述べる。

今枝ら（2013）は、小学校・中学校において障害理解教育は「総合的な学習の時間」、「道徳科」、「特別活動」などを通して行われているとしていた。また、加藤・武田（2017）は道徳科において障害理解を進めて行く上で、発達障害等のいわゆる「見えない障害」を扱うことの必要性を指摘していた。

しかし田中（2020）は、道徳科の教科用図書において障害を扱っている教材が、出版社によって掲載されている数に差があったとしており、また青木ら（2021）は、「視覚障害」や「肢体不自由」など、児童生徒が「直感的に分かりやすい障害」が多く取りあげられ、「知的障害」のような抽象性の高いと思われる障害の取り扱い

は少なかったとしており、さらに学習障害や注意欠如多動症などの発達障害は教材で確認できなかったとしていた。このように、道徳科の検定教科用図書において障害の取り上げ方に片寄りがあることが指摘されていた。一方で大西（2021）は、道徳科の教材において特別支援教育に関連する内容が多彩な取り上げ方をされており、インクルーシブ教育や共生社会を目指す上での道徳科の可能性を示すようになったと指摘し、多様性への理解の兆しを道徳教材に見ていた。

前述したように、2024（令和6年）から小学校道徳科の検定教科用図書は改訂された。本研究においては、教科用図書を用いて実際に授業を行うのは教員であることから、改訂された教科用図書の教材から教員がどのような特別な教育的ニーズを読み取り判断するのか、取り上げられている内容項目は何か、学年による違いがあるのかなどについて検討することを目的とした。

Ⅱ. 方 法

実施時期：令和6年4月～7月

調査対象：2024（令和6年）から新たに出版された小学校道徳科の検定教科用図書。「株式会社Gakken」,「株式会社光文書院」,「教育出版株式会社」,「日本文教出版株式会社」,「光村図書出版株式会社」,「東京書籍株式会社」（ABC順）以上6社から発行されている教科用図書に掲載されている教材・補助教材1303編を対象とした。

調査方法：小学校通級指導教室担当1名、小学校知的障害特別支援学級担任1名、知的障害特別支援学校小学部担任1名の特別支援教育の専門的立場にある教員3名が、調査者として道徳科検定教科用図書を読み、それぞれが特別な教育的ニーズと読み取り判断した教材の内容について記すこととした。評価の基準は表1のようにした。

表1 見立ての基準と表記方法

○	明らかに特別な教育的ニーズに関する内容が文章内や挿絵の中に示されている	量的に検討する場合： <u>2ポイント</u> とすることとした。
△	特別な教育的ニーズと思える（感じる）内容が文章内や挿絵の中に示されている	量的に検討する場合： <u>1ポイント</u> とすることとした
無印	特別な教育的ニーズと思える（感じる）内容は示されていない	量的に検討する場合： <u>0ポイント</u> とすることとした

複数の出版社で同じ教材が使用されていた。その場合は、まとめて1教材とせず個々をカウントすることとした（例えば「はしのうえのおおかみ」は全ての出版社で掲載されていた。「はしのうえのおおかみ」が各担当から選ばれた場合は、最高で6教材×3名分＝18教材となることが有り得るということである）。また特別な教育的ニーズの内容については、ひとつの教材に複数の回答を可とした。

調査内容：①「特別な教育的ニーズ」に関すること

ASD（自閉スペクトラム症）、ADHD（注意欠如多動症）、SLD（限局性学習症・学習障害）、DCD（発達性協調運動症）、HSC（ハイリーセンシティブチャイルド）、外国（外国につながる子ども）、貧困、など

② 学年、内容項目に関すること

③ 個々の教員による見立ての違いに関すること

Ⅲ. 結果と考察

1. 道徳科教科用図書教材における「特別な教育的ニーズ」に関する査読結果

(1) 学年毎の結果 その1

調査者3名が、6社の小学校道徳科検定教科用図書から読み取りを行い「特別な教育的ニーズ」に関連すると読み取り判断された教材数等をA(B)という形式で表2に示した。

A:「特別な教育的ニーズ」に関連すると読み取れた教材数

B:「明らかに特別な教育的ニーズに関する内容」と判断できた教材を2ポイント

「特別な教育的ニーズと思える(感じる)内容」と判断できた教材を1ポイント

とし、その合計点

表2 道徳科教科用図書教材における「特別な教育的ニーズ」との関連(学年毎)
(一教材に複数の特別な教育的ニーズを選択可とした)

特別な教育的ニーズ	小1	小2	小3	小4	小5	小6	計
自閉スペクトラム症	12 (12)	9 (11)	3 (3)	4 (5)	2 (2)	9 (11)	39 (44)
注意欠如多動症	10 (10)	5 (5)	11 (13)	0 (0)	2 (2)	2 (2)	30 (32)
限局性学習症	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	1 (1)	4 (4)
発達性協調運動症	4 (4)	4 (4)	2 (2)	1 (1)	2 (3)	1 (1)	14 (15)
視覚障害	1 (1)	5 (9)	11 (19)	22 (44)	15 (28)	15 (28)	69 (129)
聴覚障害	1 (1)	0 (0)	3 (6)	6 (12)	11 (17)	10 (19)	31 (55)
肢体不自由	34 (64)	18 (32)	26 (48)	30 (53)	28 (53)	47 (85)	183 (335)
病弱・身体虚弱	1 (1)	0 (0)	12 (23)	23 (41)	38 (65)	28 (53)	102 (183)
知的障害	4 (4)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	4 (4)	6 (11)	15 (20)
外国につながる子ども	52 (83)	17 (29)	34 (58)	38 (64)	22 (35)	24 (42)	187 (311)
LGBTQ+	0 (0)	1 (1)	2 (4)	1 (1)	3 (4)	5 (7)	12 (17)
貧困	0 (0)	0 (0)	6 (9)	1 (2)	7 (10)	15 (22)	29 (43)
HSC※1	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	4 (4)
ゲーム依存症	0 (0)	1 (1)	6 (9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (10)
その他	2 (2)	1 (1)	0 (0)	3 (4)	7 (10)	3 (4)	16 (21)
計	122 (183)	63 (95)	117 (195)	129 (227)	144 (236)	167 (287)	742 (1223)

※1 HSC: ハイリーセンシティブチャイルド

最も多かったのが「外国につながる子ども」で187教材(311ポイント)であった。子ども同士の交流が描かれているエピソード教材もあるが、肌の色や髪の色等が周囲の児童とは異なり「外国につながる子ども」を表現していると受け止められる学校風景を描写した挿絵が多かった。小学校学習指導要領(文部科学省,2017)に示されているグローバル化への対応、インバウンドの増加などを反映したものと考えられた。

二番目に多かったのが「肢体不自由」で183教材(335ポイント)であった。車椅子に乗っている児童が描かれている挿絵が多く掲載されていた。三番目は病弱・身体虚弱で102教材(183ポイント)であった。院内学級や白血病などのエピソード教材が掲載されていた。青木ら(2021)が指摘していた、児童生徒が「直感的に

分かりやすい障害」が多く取りあげられる傾向は変わっていないことが示された。

加藤・武田（2017）は、発達障害等のいわゆる「見えない障害」を扱うことの必要性を指摘しており、青木ら（2021）も、「学習障害や注意欠陥多動性障害などの発達障害は教材で確認できなかった」としていた。しかし、多くはないが今回の改定により「自閉スペクトラム症」や「注意欠如多動症」などの特性が表現されていると受け止められる教材が掲載されていた。しかし、教材の序盤では自己中心的や衝動性、多動性と捉えられる児童の行動特性が明確に表現されている一方、終盤では自分の行動を反省する描写が顕著に示されていることから、明らかな特別な教育的ニーズとは判断し難い点があった。これは自分の行動を振り返り反省する、あるいは自分事として考えるための道徳科教材の特徴なのだろうと考えられた。

また、「LGBTQ+」や「ゲーム依存症」など新たな特別な教育的ニーズについての教材についても数的には少ないが掲載されていた。

「視覚障害」、「聴覚障害」、「病弱・身体虚弱」などは、学年が上がるにつれて教材数が増える傾向にあった。また、「自閉スペクトラム症」、「注意欠如多動症」、「発達性協調運動症」ではないかと明確ではないが読み取り判断できる教材は、低学年で多く掲載される傾向にあった。これはそうした行動特性を有する児童への周囲の理解を促すことや、特性のある児童自身が学校生活に順応できるようなモデルを示すこと、学習リテラシーを身に付ける糸口とすることなどを目的とした教材配置ではないかと考えられた。

（2）学年毎の結果 その2

小学校道徳科検定教科用図書から読み取れた特別な教育的ニーズに関するポイントの合計（B）から、「特別な教育的ニーズ」に関連すると読み取れた教材数（A）を引いた数値を表3に示した。（B）－（A）により「明らかに特別な教育的ニーズに関する内容」と判断された教材数が分かる。

表3 「明らかに特別な教育的ニーズに関する内容」が示された教材

（一教材に複数の特別な教育的ニーズを選択可とした）

特別な教育的ニーズ	小1	小2	小3	小4	小5	小6	計
自閉スペクトラム症	0	2	0	1	0	2	5
注意欠如多動症	0	0	2	0	0	0	2
限局性学習症	0	0	0	0	0	0	0
発達性協調運動症	0	0	0	0	1	0	1
視覚障害	0	4	8	22	13	13	60
聴覚障害	0	0	3	6	6	9	24
肢体不自由	30	14	22	23	25	38	152
病弱・身体虚弱	0	0	11	18	27	25	81
知的障害	0	0	0	0	0	5	5
外国につながる子ども	31	12	24	26	13	18	124
LGBTQ+	0	0	2	0	1	2	5
貧困	0	0	3	1	3	7	14
HSC	0	0	0	0	0	0	0
ゲーム依存症	0	0	3	0	0	0	3
その他	0	0	0	1	3	1	5
計	61	32	78	98	92	120	481

明確に特別な教育的ニーズについて表現しているとされた教材は、「肢体不自由」や「外国につながる子ども」、

「視覚障害」が多かった。これらは低学年から検定教科用図書に掲載されていた。それ以外の特別な教育的ニーズについては、小学校3年生以降に掲載される傾向にあった。これは児童の発達段階を考慮してのことであろう。また、「限局性学習症」や「自閉スペクトラム症」、「注意欠如多動症」、「発達性協調運動症」などの発達障害に関しては、明確に表現している教材が少なく、その特性を読み取り判断することが難しいことが分かった。これは、前述したように物語の終盤で自分の行動を振り返り反省する様子が描かれることから、序盤で表現された行動特性が緩和されるように読み取れることによると考えられた。

2. 道徳科教科用図書を発行している出版社ごとの特別な教育的ニーズの掲載について

道徳科教科用図書を発行している6つの出版社をA社、B社、C社、D社、E社、F社として示した。

(1) 出版社毎の結果 その1

調査者3名が「特別な教育的ニーズ」に関連すると見立てた教材数等をA(B)という形式で表4に示した。

表4 道徳科教科用図書教材における「特別な教育的ニーズ」との関連（出版社毎）
(一教材に複数の特別な教育的ニーズを選択可とした)

特別な教育的ニーズ	A社	B社	C社	D社	E社	F社	計
自閉スペクトラム症	7 (9)	2 (3)	17 (19)	4 (4)	5 (5)	4 (4)	39 (44)
注意欠如多動症	3 (4)	5 (5)	9 (10)	6 (6)	1 (1)	6 (6)	30 (32)
限局性学習症	1 (1)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	4 (4)
発達性協調運動症	1 (2)	1 (1)	5 (5)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	14 (15)
視覚障害	14 (27)	4 (8)	6 (11)	10 (17)	17 (33)	18 (33)	69 (129)
聴覚障害	6 (11)	0 (0)	3 (5)	7 (13)	5 (9)	10 (17)	31 (55)
肢体不自由	25 (42)	34 (65)	34 (63)	32 (58)	30 (55)	28 (52)	183 (335)
病弱・身体虚弱	21 (41)	18 (30)	21 (37)	12 (24)	16 (26)	14 (25)	102 (183)
知的障害	3 (5)	3 (3)	2 (2)	1 (1)	5 (8)	1 (1)	15 (20)
外国につながる子ども	25 (46)	47 (76)	21 (36)	17 (33)	41 (66)	36 (54)	187 (311)
LGBTQ+	3 (4)	4 (6)	3 (5)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	12 (17)
貧困	8 (13)	6 (9)	3 (4)	2 (2)	3 (3)	7 (12)	29 (43)
HSC	1 (1)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	4 (4)
ゲーム依存症	0 (0)	0 (0)	3 (6)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	7 (10)
その他	3 (6)	2 (3)	4 (4)	3 (4)	2 (2)	2 (2)	16 (21)
計	121 (212)	126 (209)	135 (211)	98 (166)	131 (214)	131 (211)	742 (1223)

教科書を発行している出版社によって、特別な教育的ニーズの取り扱いに差が見られた。特別な教育的ニーズに関する教材数では最も多いのはC社の135教材、次いでE社、F社の131教材であった。最も少ないのはD社の98教材で、C社とは37教材の差であった。また、LGBTQ+やゲーム依存症などについて読み取り判断できる教材は全体的に少なく、出版社によって差があることが分かった。

C社の「自閉スペクトラム症」17教材(19ポイント)や、B社の「外国につながる子ども」47教材(76ポイント)のように、ある特別な教育的ニーズに特化して教材数の多い出版社があった。一方で限局性学習症については、読み取り判断できる教材が全ての出版社で少ないことが分かった。ゲーム依存症を取り上げた出版社は2社のみであった。

(2) 出版社毎の結果 その2

調査者3名が「特別な教育的ニーズ」に関連すると見立てた結果についてB-Aを行い表5に示した。

表5 道徳科教科用図書教材における「特別な教育的ニーズ」との関連（出版社毎：B-A）
（一教材に複数の特別な教育的ニーズを選択可とした）

特別な教育的ニーズ	A社	B社	C社	D社	E社	F社	計
自閉スペクトラム症	2	1	2	0	2	0	5
注意欠如多動症	1	0	1	0	0	0	2
限局性学習症	0	0	0	0	0	0	0
発達性協調運動症	1	0	0	0	0	0	1
視覚障害	13	4	5	7	16	15	60
聴覚障害	5	0	2	6	4	7	24
肢体不自由	17	31	29	26	25	24	152
病弱・身体虚弱	20	12	16	12	10	11	81
知的障害	2	0	0	0	3	0	5
外国につながる子ども	21	29	15	16	25	28	124
LGBTQ+	1	2	2	0	0	0	5
貧困	5	3	1	0	0	5	14
HSC	0	0	0	0	0	0	0
ゲーム依存症	0	0	3	0	0	0	3
その他	3	1	0	1	0	0	5
計	91	83	76	68	83	80	481

「視覚障害」や「聴覚障害」、発達障害、そして今日的な特別な教育的ニーズの教材の取り上げ方について、各社の傾向が現れている。例えば、「自閉スペクトラム症」や「注意欠如多動性」などの発達障害関連に関する教材について、2社は明確に示した教材がないと捉えられた。また、LGBTQ+やゲーム依存症などの取り上げ方についても出版社によって片寄りがあった。

「視覚障害」や「肢体不自由」、「病弱・身体虚弱」については全ての出版社で取り上げており、教材数も一定数示された。しかし「聴覚障害」や「知的障害」については明確に読み取り判断できる教材が非常に少ないことが分かった。

3. 調査者個々の特別な教育的ニーズの見立てについて

α氏：小学校通級指導教室担当

β氏：小学校知的障害特別支援学級担任

θ氏：知的障害特別支援学校小学部担任

以上の3名が、それぞれに道徳科の検定教科用図書を査読し、特別な教育的ニーズについて記載されている、と感じた教材に評定を行った。評定の方法は表1を参照されたい。

表6 調査者個々による「特別な教育的ニーズ」の見立て

(一教材に複数の特別な教育的ニーズを選択可とした)

特別な教育的ニーズ	α氏	β氏	θ氏	計
自閉スペクトラム症	25 (30)	10 (10)	4 (4)	39 (44)
注意欠如多動症	19 (20)	3 (3)	8 (9)	30 (32)
限局性学習症	4 (4)	0 (0)	0 (0)	4 (4)
発達性協調運動症	7 (8)	2 (2)	5 (5)	14 (15)
視覚障害	24 (43)	25 (49)	20 (37)	69 (129)
聴覚障害	13 (20)	12 (23)	6 (12)	31 (55)
肢体不自由	70 (118)	70 (135)	45 (82)	183 (335)
病弱・身体虚弱	31 (54)	43 (81)	28 (48)	102 (183)
知的障害	10 (12)	3 (5)	2 (3)	15 (20)
外国につながる子ども	79 (153)	54 (82)	54 (76)	187 (311)
LGBTQ+	3 (5)	4 (7)	5 (5)	12 (17)
貧困	16 (28)	2 (4)	11 (11)	29 (43)
HSC	3 (3)	0 (0)	1 (1)	4 (4)
ゲーム依存症	2 (2)	3 (4)	2 (3)	7 (10)
その他	0 (0)	1 (2)	15 (9)	16 (21)
計	306 (501)	232 (407)	204 (315)	742 (1223)

α氏が特別な教育的ニーズと読み取り判断できるとしたの教材は、306教材（501ポイント）であった。一方、θ氏は204教材（315ポイント）であった。両者の間には102教材（186ポイント）の差が示された。

α氏とθ氏は、両者とも特別支援教育の専門的立場として仕事をしている。α氏は通級指導教室担当、θ氏は知的障害特別支援学校小学部の勤務ということで、α氏は発達障害等の対応が中心、θ氏は知的障害等の対応が中心であった。このように特別支援教育の専門的立場にある二者であっても教材から特別な教育的ニーズを読み取り判断することに差が示された。こうしたことから、特別な教育的ニーズとして読み取り判断することの、個人差は大きいと考えられた。

α氏とβ氏、θ氏の三者を比較しても、α氏＞β氏＞θ氏という関係となる。こうした読み取りの差は日常的に接している児童の様相に関係している可能性も考えられる。3人の調査者は、道徳教科教科用図書の教材1303教材の中でおよそ15%～23%の教材に特別な教育的ニーズを読み取っていた。そうした気付きを小学校の年代から特別な教育的ニーズの理解や自分事として考えることに繋げていくのが、インクルーシブな社会を形成する上で大切な取り組みになると考えられた。

本研究は、道徳科検定教科用図書の査読を特別支援教育の専門性のある教員が調査者となり、さらに前提として特別な教育的ニーズに関する教材の読み取りという条件が付されていた。少なからず特別な教育的ニーズに関するバイアスがある状態での読み取り判断であったであろう。そうしたことを鑑みると、通常の学級担任の先生方が同じ教材からどのように特別な教育的ニーズに関する読み取りを行うのか、また、そのことを念頭において授業を構築できるのかという点に関しては、判断材料がないことから今後の課題としていきたい。

3. 特別な教育的ニーズと内容項目との関連

道徳科の内容項目とは、道徳的価値を含む内容を短い文で平易に示したものである。また、道徳的価値とは、より良く生きるために必要とされるものであり、人間としての生き方の礎となるものとされている。より高い目標を立て、希望と勇気をもつことで、困難なことがあっても努力を積み重ね、目標を達成することを目指す

ものである（小学校学習指導要領，2017）。

表7 道徳科の内容項目と「特別な教育的ニーズ」に関する教材との関係

（一教材に複数の特別な教育的ニーズを選択可とした）

視 点	内容項目	教材数
A 主として自分自身にすること	① 善悪の判断，自律，自由と責任（低，中，高）	10
	② 正直，誠実（低，中，高）	11
	③ 節度，節制（低，中，高）	40
	④ 個性の伸長（低，中，高）	32
	⑤ 希望と勇気，努力と強い意志（低，中，高）	45
	⑥ 真理の探究（高）	17
B 主として人との関わりに関すること	⑦ 親切，思いやり（低，中，高）	88
	⑧ 感謝（低，中，高）	11
	⑨ 礼儀（低，中，高）	24
	⑩ 友情，信頼（低，中，高）	47
	⑪ 相互理解，寛容（中，高）	10
C 主として集団や社会との関わりに関すること	⑫ 規則の尊重（低，中，高）	47
	⑬ 公正，公平，社会正義（低，中，高）	63
	⑭ 勤労，公共の精神（低，中，高）	16
	⑮ 家族愛，家庭生活の充実（低，中，高）	26
	⑯ よりよい学校生活，集団生活の充実（低，中，高）	18
	⑰ 伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度（低，中，高）	8
	⑱ 国際理解，国際親善（低，中，高）	96
D 主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること	⑲ 生命の尊さ（低，中，高）	67
	⑳ 自然愛護（低，中，高）	7
	㉑ 感動，畏敬の念（低，中，高）	5
	㉒ よりよく生きる喜び（高）	9

小学校の道徳科で取り上げられている内容項目，22項目全てに特別な教育的ニーズに関連した内容が含まれ，網羅されていることが分かった。特別な教育的ニーズのある人々に対しての理解や対応のあり方について自分事として考える機会が多く取り上げられていた。その学級や児童が生活する環境に合わせた授業を通しての，道徳的価値に対しての気づきが大切にされていると考えられた。

中でも，特別な教育的ニーズと関連の多かった内容項目を5番目まで示す。

- ①「国際理解，国際親善」96教材
- ②「親切，思いやり」88教材
- ③「生命の尊さ」67教材
- ④「公正，公平，社会正義」63教材
- ⑤「友情，信頼」47教材
- ⑤「規則の尊重」47教材

上記の内容項目の指導の観点は以下のようになっている。

- ・「国際理解，国際親善」は小学校低学年では「他国の人々や文化に親しむこと」，中学年では「他国の人々や文化に親しみ，関心をもつこと」，高学年では「他国の人々や文化について理解し，日本人としての自

覚をもって国際親善に努めること」。

- ・「親切、思いやり」は小学校低学年では「身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること」、中学年では「相手のことを思いやり、進んで親切にすること」、高学年では「誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること」。
- ・「生命の尊さ」は小学校低学年では「生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること」、中学年では「生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること」、高学年では「生命が多くての生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること」。
- ・「公正、公平、社会正義」は小学校低学年では「自分の好き嫌いとらわれないで接すること」、中学年では「誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接すること」、高学年では「正義の実現に努めること」。
- ・「友情、信頼」は小学校低学年では「友達と仲よくし、助け合うこと」、中学年では「友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと」、高学年では「友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと」。
- ・「規則の尊重」は、小学校低学年では「約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること」、中学年では「約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること」、高学年では「法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと」。

「国際理解、国際親善」が最も多かった理由として、前述したように小学校学習指導要領（文部科学省、2017）に示されているグローバル化への対応、インバウンドの増加などが影響していると考えられた。特に、学校風景を描写した挿絵に「外国につながる子ども」と受け止められる表現が多かったことによると考えられた。

「親切、思いやり」、「生命の尊さ」、「公正、公平、社会正義」、「友情、信頼」は、他者としての視点から特別な教育的ニーズのある人々への理解や対応のあり方について自分事として考える教材と捉えられた。一方「規則の尊重」は、集団の中の一人として守らなければならない約束事やルールを、自分自身の行動を振り返り自分事として考える教材と捉えられた。このように他者理解、自己理解という両側面から特別な教育的ニーズについて考える教材が提供されていた。

IV. まとめ

本研究は、2023年に改訂された「特別の教科 道徳」の教科用図書において、どのような特別な教育的ニーズについて読み取り判断できるのか、内容項目や学年との関連について検討することを目的とした。

青木ら（2021）が指摘していたように、「直感的に分かりやすい障害」が多く取りあげられ、「発達障害」のような見えにくい障害については掲載が少ない傾向は変わらなかった。一方で、「LGBTQ+」や「ゲーム依存症」、「外国につながる子ども」といった新たな特別な教育的ニーズについて取り上げられていたことが分かった。

特別な教育的ニーズの教材は、出版社毎に特徴があり教材数や取り上げられる特別な教育的ニーズの傾向が異なっていることが分かった。そうしたことから各自治体で採用された出版社の検定教科用図書によって、特別な教育的ニーズに関する児童の学びに違いが生じるのではないかと考えられた。

現代は特別な教育的ニーズのパラダイムの拡大が著しく、周囲の人々の理解と対応が喫緊の課題となっている。「特別の教科 道徳」の学びを通して「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合うとともに、他者との話し合いを通して多面的・多角的な視点から特別な教育的ニーズに関する理解を深めることが期待される。

引用・参考文献

- 青木利樹・田中 亮・奥住秀之&大井雄平（2021）小学校・中学校における「特別の教科 道徳」の教材としての障害—障害と内容項目の関連に着目して—．教育研究実践報告誌，4-2，19-26.
- 今枝史雄・楠 敬太&金森裕治（2013）通常の小・中学校における障害児理解教育の実態に関する研究（第Ⅱ報）—実施状況及び教員の意識に関する調査を通して—．大阪教育大学紀要，第Ⅳ部門，61，63-76.
- 加藤充子・武田鉄郎（2018）小学校6年間の系統立てた障害理解教育の一提案—2つの道徳授業の実践を通して．和歌山大学教職大学院紀要，学校教育実践研究，2，159-167.
- 経済産業省（2023）第Ⅱ部 第2章 グローバルな成長の取り込みによる成長力の強化，
<https://www.meti.go.jp/report/tsuhaku2023/2023honbun/i22300000.html>（令和6年11月11日閲覧）
- 大西孝志（2020）道徳における特別支援教育の扱いについて—教科書の分析を通して．東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究年報，12，3-13.
- 田中 亮（2020）小学校・特別の教科道徳における「障害」を扱う教材．未来を拓く．教育実践学研究，4，140-14.

対象とした道徳科検定教科用図書（ABC順）

- Gakken（2023検定）「新版 みんなのどうとく 1」
- Gakken（2023検定）「新版 みんなのどうとく 2」
- Gakken（2023検定）「新版 みんなのどうとく 3」
- Gakken（2023検定）「新版 みんなの道徳 4」
- Gakken（2023検定）「新版 みんなの道徳 5」
- Gakken（2023検定）「新版 みんなの道徳 6」
- 光文書院（2023検定）「しょうがく どうとく ゆたかなこころ 1ねん」
- 光文書院（2023検定）「小学 どうとく ゆたかなこころ 2年」
- 光文書院（2023検定）「小学 どうとく ゆたかな心 3年」
- 光文書院（2023検定）「小学 道徳 ゆたかな心 4年」
- 光文書院（2023検定）「小学 道徳 ゆたかな心 5年」
- 光文書院（2023検定）「小学 道徳 ゆたかな心 6年」
- 教育出版（2023検定）「しょうがくどうとく1 はばたこうあすへ」
- 教育出版（2023検定）「小学どうとく2 はばたこう明日へ」
- 教育出版（2023検定）「小学どうとく3 はばたこう明日へ」
- 教育出版（2023検定）「小学道徳4 はばたこう明日へ」
- 教育出版（2023検定）「小学道徳5 はばたこう明日へ」
- 教育出版（2023検定）「小学道徳6 はばたこう明日へ」
- 日本文教出版（2023検定）「しょうがくどうとく いきるちから1」
- 日本文教出版（2023検定）「小学どうとく 生きる力2」
- 日本文教出版（2023検定）「小学どうとく 生きる力3」
- 日本文教出版（2023検定）「小学道徳 生きる力4」
- 日本文教出版（2023検定）「小学道徳 生きる力5」
- 日本文教出版（2023検定）「小学道徳 生きる力6」
- 光村図書（2023検定）「どうとく1 きみがいちばんひかるとき」
- 光村図書（2023検定）「どうとく2 きみがいちばんひかるとき」
- 光村図書（2023検定）「どうとく3 きみがいちばんひかるとき」
- 光村図書（2023検定）「道徳4 きみがいちばんひかるとき」

光村図書（2023検定）「道徳5 きみがいちばんひかるとき」
光村図書（2023検定）「道徳6 きみがいちばんひかるとき」
東京書籍（2023検定）「新訂 あたらしいどうとく1」（小学1年生）
東京書籍（2023検定）「新訂 新しいどうとく2」（小学2年生）
東京書籍（2023検定）「新訂 新しいどうとく3」（小学3年生）
東京書籍（2023検定）「新訂 新しいどうとく4」（小学4年生）
東京書籍（2023検定）「新訂 新しい道徳5」（小学5年生）
東京書籍（2023検定）「新訂 新しい道徳6」（小学6年生）